座談会「黒川文庫の過去・現在・未来」

日　時　二〇一〇年八月五日（木）
場　所　文芸資料研究所
出　席　者

加藤昌嘉（法政大学准教授）
久保木秀夫（鶴見大学専任講師）
久保田孝夫（大阪成蹊短期大学教授）
田中　登（関西大学教授）
上野英子（本学教授）
佐藤　悟（本学教授）
司会・横井　孝（本学教授）

■はじめに■

横井▼ 本日はお暑いなか、また夏休みが始まったばかりで御予定も多い時にお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。最初に、この会の趣旨の説明をいたします。

ご存じの通り、本学図書館は常磐松文庫・黒川文庫・山岸文庫、その他のコレクションを所蔵しています。「常磐松文庫」は主に本学が渋谷にありましたころに集積された古典籍の文庫、「黒川文庫」は黒川真頼の蔵書がその没後に分散した時、本学が物語関連のものを購入しました。山岸徳平先生旧所蔵の「山岸文庫」については斯界では有名で、今更申し上げることもないと思います。

先程、各文庫のものをざっと駆け足で見学していただきましたが、総量としてはかなりの数に上るのではないかと自負しております。ただ、今のところ、公刊した目録としては、黒川のものしかありません[1]。それも三谷栄一氏が図書館長だった一九六七年のもので、かなり古い時代のものになってしまいました。それ以後、蔵書も増えておりますので、そろそろ目録を更新する必要があるのでは、と考えております。

そこで今年度、私どもの文芸資料研究所で、本学図書館所蔵の黒川文庫の目録を作り直すことになったわけで

すが、各書目の書誌の再調査をする必要が生じました。本学が所蔵する黒川真頼旧蔵本は、他の研究機関のものに比べて小さな、物語の部に限定されるものですが、これも多岐にわたりますので、そのような典籍に造詣の深い先生方に集まっていただき、ご意見をお聞かせ願いたい、さらにできれば関連する最新情報なども伺えたら、と図々しいことを考えて、先生方にお声をかけたわけです。雑談めいたお話でもありがたいと思っておりますので、後は自由にご発言いただければと思います。

なお、皆様のお手許に資料がありますので御覧下さい。まず、①本学の『文学部紀要』第二三集（一九八一年三月）に永田清一さん――これは、当時図書館学課程の教授でしたが――の「黒川文庫」という論文のコピー、それから②青裳堂書店の日本書誌学大系『黒川文庫目録　索引編』（二〇〇一年九月）の解題の部分[2]、それからこれは一枚だけですけど、③「新版」目録のサンプルとして作ったものをお配りしております。サンプルについては、これから改善の余地があるかもしれませんので、具体的なアドバイスを頂ければと思います。

ただ、図書館の目録が、初期の方によって作られたので、国文学などの専門的な利用には不十分、ということもありまして、現在考えられる限りにおいての最低限の情報を盛り込んだものを作り直したい、というふうに考えています。

■同じ体裁の本の存在■

加藤▼　実践女子大学の山岸文庫・常磐松文庫、そして黒川文庫の『源氏物語』関係の本は、数年前から何度か閲覧させていただいております。今日、特に、希望して閲覧をお願いしたのが、黒川文庫の『兵部卿物語』と山岸文庫の『雫ににごる』です。ともに、「中世王朝物語」と呼ばれているものです。

『兵部卿物語』は袋綴じの大本で、下三分の二に本文が写してあり、上三分の一に頭注が付いています。これは、蓬左文庫にある『夢の通ひ路物語』と同じレイアウ

ト（書記形態）です。おそらく、親本は枡形本で、それを袋綴じの本に写す際に、本文は、下三分の二にそのまま写し、空白となった上三分の一に注を書いたのではないか、と思われる形式です。黒川文庫の『兵部卿物語』がその形式で写されているということは、親本の成立年代は不明ではあるものの、少なくとも、親本が枡形本であったと推察する根拠となりましょう。

また、この『兵部卿物語』、表紙はグレーでしたが、こちらにある『岩清水物語』とよく似た色・大きさの本ですから、この『兵部卿物語』は『岩清水物語』と同時代に書写された可能性もないではない、と考えられて来ます。

我々は、或る特定の作品だけを見に、各地の図書館・文庫に行くことが多いわけですが、実は、その作品と同じ表紙、同じ筆跡、同じ大きさの本が、その図書館に存在する可能性がある、ということを切に感じました。宮内庁書陵部でも、国文学研究資料館でも、同じ表紙や同じ筆跡の、異なる作品を偶然目にする機会がありました。

こちらに所蔵されている、（黒川文庫目録）一二八番『苔の衣』と一三八番『松浦の宮』は、同じ表紙、同じ紙、同じ筆跡です。目録からは窺知できないのですが、他にも、まだあるかもしれません。「この本とこの本は表紙が同じ」「筆跡が同じ」という情報が目録にあれば、その目録は、非常に価値を高めるのじゃないかと思うと

ころです。

横井▼ そういう提案や情報はありがたいですね。今のところ、新しい目録については、まだグランドデザインも固まっていないところですから。

田中▼ 鶴見大学におられた池田利夫先生が『浜松中納言』と『我が身にたどる姫君』でしたか……

久保木▼ いわゆる祖型本の『浜松中納言物語』の問題ですね。鶴見大学図書館蔵の『浜松中納言物語』巻二の零本と、国文学研究資料館寄託の『我身にたどる姫君』や『恋路ゆかしき大将』、『とりかへばや』などの九条家旧蔵の写本とが、実は同筆同体裁であり、その制作に密接な関係があったらしいという。[3]

田中▼ そういう関連性を見いだされて、それがそれぞれの本の書誌的研究に大きく寄与するということがあったと思います。それが今の提案で実現できればいいですね。

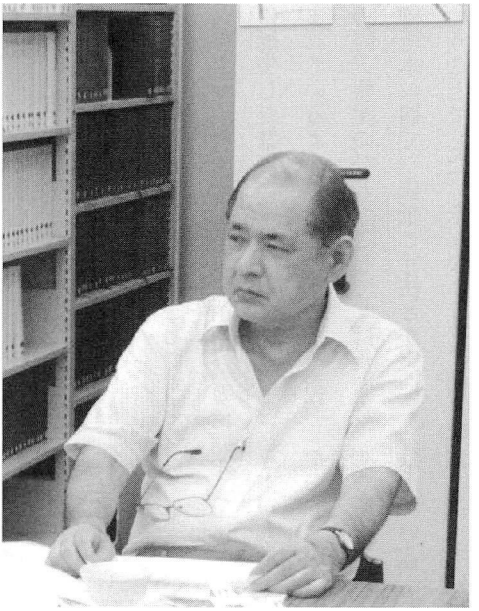
横井▼ いつぞやの久保木先生が発表された宮内庁書陵部の同じ体裁のものがあったという発見も、レベルは違うかもしれませんが同様のことですよね。[4]

久保木▼ 書陵部御所本の中に、万治四年（一六六一）に焼失した禁裏文庫本の、焼失以前の転写本が大量に含まれているようだ、ということを指摘したのですが、その時、根拠のひとつとして挙げたのが、少なくない数の御所本の間で、表紙と寸法とが完全に一致している、ということでした。そんなふうに、同じ体裁を持っている

ことから、写本の性格や、写本同士の関連性が新たに明らかになるという例は、ほかにもまだまだあるんじゃないかと思います。が、加藤さんがおっしゃったように、そういうことは、一点一点を別々に調べていては、なかなか気づきにくいことなんですよね。文庫を通覧できる立場で、縦覧的に見ていって初めて分かる、という場合も多いと思います。今回の目録作りがそのよい機会になるのでしたら、素晴らしいですね。

加藤▼ 今日は、目録を見て、縦横の寸法が非常に近い本を複数出納していただくようお願いしました。すると、まさに同じ表紙・同じ筆跡の本をいくつか見出すことができました。この目録には表紙の柄や色の情報は皆無なので、次の新しい目録にそうした情報が追加されれば、実にありがたい。

田中▼ もう一つ、途中から口を出させていただきますと、物語を書写して、頭注形式になっているのは確か改作本『寝覚』（夜寝覚物語）もそうだったと思います。神宮文庫のものでしたが、ああいうものは国学者流の写しなのか、つまり江戸時代になって版本が、頭注形式、たとえば『湖月抄』のように出てきます。写本のあり方としてそういうものに影響を受けたんでしょうね。少なくとも古い時代には考えられないですよね。



横井▼ そうすると、たとえば元本が枡形で、それを、敷き写しか脇においての書写かはわかりませんが、そういう形を想像させるというわけではない、ということで

すか。

田中▼　それはそう考えてもいいのかもしれないし、大体、物語というのは縦長の本は少ないですからね。本文だけを写そうと思ったら、枡形本だろうというところを、少し人物の考証や注釈を入れたいときには、行間ではなく頭注形式をとるということです。

久保田▼　枡形本の書写の際には、まず基本的に新しい本を作って、ページ数を合わせておいてから、文字数と行数もそのままに写す、というその書写のやり方は大きな本の書写を行う場合に、字数も行数もそのまま同じにしてしまうために、そのような書写形態が生まれてくる可能性があるのではないかと思います。

■文献の検索■

久保田▼　今お話に出ていた『松浦宮物語』ですが、私が一九九七年に『松浦宮物語』のテキストを作ったときには、こちらには足を運びませんでした（笑）。それで伝本について一応書きましたけれど、それは萩谷朴氏の文庫本などを基にしながら、その説にのっとってということでやりました。[5]

実は『国書総目録』を調べても、『松浦宮物語』の調査の頃には、こちら実践女子大学にある本が、全部は掲載されていないのですよね。黒川文庫と常磐松文庫が各一本ずつの二本ぐらいしか載っていないわけです。た

だ、こちらの『年報』の五号と一七号で調査報告がなされているので知りうることができたということです。

もう一つ『古典籍総合目録』にしても、本居宣長記念館にある分だけです。実際には今の『総目録』ではほとんど見られない、という状態が起こっているわけです。

広島大学の妹尾好信先生とお話していたんですが、広島大学にも一本『松浦宮物語』があるんですが、これも全然知られていなくて、藤井高尚の「松乃や蔵書」の蔵書印のあるものですが、本居宣長の本との関係が出てくる可能性が非常に強いので、同じ親本からずっと写し伝えられているかもしれません。実際こちらでそういう目録を作ったら、ぜひ電子化して、そしてそれぞれの文庫も電子化されて、検索が少しでも楽になるといいですね。

加藤さんも久保木さんも国文学研究資料館におられましたが、本当はあそこがやるべきことじゃないのかなと思います。それが出来た時は、壮大ですごいなと思ったのですが、もうあの分では足りなくなっていると思います。やはり落ちがいっぱいあるという状態が見えてきているんじゃないでしょうか。これからは本の形では膨大すぎて無理です。本にするとどんどんもれてしまうわけですから、電子化していつでも追加できるように、各蔵書を所蔵している機関が進めてもらいたいものです。

加藤▼ 私たちはもう国文学研究資料館を辞めましたので、かばうつもりはありませんが（笑）、現在は「日本古典籍総合目録データベース」という形で、『国書総目録』と『古典籍総合目録』とそれ以降に追加された分を電子化して、資料館のホームページで検索できます。ただし、全国の図書館・文庫が「こういうのがあります」という目録を出してくれない限り、国文学研究資料館が勝手に電子化することはできませんから、所蔵機関が資料館に情報を提供してくれる体制が整えば、お互い、作業が楽になり、研究者も情報を一括して見ることができるようになるでしょう。全国の図書館・文庫には、ぜひ、国文学研究資料館への情報提供と概念共有をお願いしたいですね。

久保木▼　大学図書館によっては、webcat に古典籍のデータを載せている場合がありますね。資料館のデータベースでは出てこない伝本が、そこで見つかる場合もあります。現状ではいろんなデータベースを併用しながら探していくしかないと思います。

田中▼　今は大学によっては、実践女子大学の場合は、ずっと前から所蔵しているからいいですけど、新しく購入すると入力するわけです。そうするとそこの専任教員が知らなくて、よその大学の人から「おたくはこういうものを買ったそうですね」と言われることがあるそうです。だんだんそうなっていくんじゃないでしょうか。

でも、それで日本中のすべての書籍の存在が明らかになったら、それはそれで楽しみがない、そんな気もします（笑）。

横井▼　個人蔵のものは無理ですよね。

久保木▼　大学蔵のもので、いつの間にかホームページで目録が公開されている、という場合もありますね。以前、長沢規矩也の「学書言志」というコレクションがどこに行ったのか調べていたら、何と関西大学図書館にあって、しかもホームページで検索システムや目録まで公開されていたということがあり、非常に驚きました。各大学がｗｅｂ上で公開している、そういった古典籍データのポータルサイトがあると、大変便利だと思います。国立国会図書館でも「ＰＯＲＴＡ」というデジタルアーカイブポータルを構築していますが、大学図書館などはまだまだ網羅されていないようです。例えば資料館みたいなところで、そういったポータルサイトを作ってもらえるとありがたいですね。もう離れたので気楽に言えます（笑）。

横井▼　久保木さんのホームページの古筆の一覧（資料館ホームページの「古筆切所収情報データベース」）は何度か使わせていただいたことがあります。あれも情報としては確実なものしか載っていない。

久保木▼　図版が公刊されているものだけに限っています。個人蔵のものや未公開のものは、やはりご所蔵先の方々のご意向が第一ですので、存在を公にするのは憚ら

れるところがあります。

横井▼ せめて、端的に「ある」という情報だけでも欲しいですけどね。誰が持っているかは別として。

久保木▼ 「ある」という情報だけわかっても、肝心の実物が見られないのでは、かえって申し訳ない気もしますが（笑）。

■『紫式部集』の場合■

横井▼ 少し話が戻りますが、久保田さんに伺いたいのですが、久保田さん・廣田さんのお二人が陽明文庫の『紫式部集』を調べたときに、他の私家集と表紙が同じものだった、ということがありましたね。

久保田▼ 最近、横井先生と一緒に『紫式部集』を手がけたんですが、[6] 今日も、実践女子大学の『紫式部集』を実見させてもらったのですが、実践本の成立には、かなりデリケートな問題があって、奥付のところの「天文廿五年」、その「廿」のところが擦り消しされた上に書き直されている。田中先生と「どうでしょう」と見比べて見たのですが、天文は二四年までなので、架空の年号に書き換えるのはどうしてもおかしいと思います。それについては野村先生も横井先生もそれぞれの立場で発表されていますが、なかなかその意図を解くことができないでいます。

陽明文庫本も同志社大学の廣田收先生と一緒に行って見せてもらったのですが、あれも三十六人集の一巻でしかないことがわかりました。それを近衛信尹が間違いなく編纂したこと、これは名和修陽明文庫長からも聞きました。この集の中に近衛信尹の筆跡のものがあります。信尹が興味深い人物であることは、横井先生がこの前の式部集の発表でもおっしゃっていて、[7] 先日は雑誌にも載りました。[8] ただ実際のところ、信尹があの式部集を、どこから本を持ってきて写したのかが明らかにならないといけないですね。『紫式部集の研究〈校異篇／伝本研究篇〉』（笠間書院）で諸本研究をまとめられた南波浩先生は陽明本を古本系と分類されたのですが、どういう意味

合いで「古本系」の称を用いられたのか。ただ定家本とは違うというだけの分類ですから。今のところは実践本だということは言われていますが、それを出したのも南波先生ですから……。

少し話は戻りますが、実践女子大本（現在の呼称を使いますが）を購入する際に三谷栄一先生が、南波浩先生に写真を送ってきたそうです。実践の前はたしか一誠堂にあったのだと思いますが、ちょうど南波先生が『紫式部集』の校本を作っていた時で、三谷先生が「これはどうだろう。見てほしい」ということだったようです。もともと南波先生は購入する意志はあったそうですけど、図録から今までのと大して違わないだろうと考えられて買い控えたのだそうです。ところが、三谷先生から実際に写真を見せられてみると、それ以前に南波先生が報告している、墨染にある瑞光寺本の『紫式部集』には落丁があったのに、その部分が含まれた本文だったので、南波先生が、これを瑞光寺本の親本と決められた、という経緯がありました。

その現物の『紫式部集』を見せていただいても、本当にどこまで本文としてさかのぼれるのか、池田和臣さんのように、まず紙を炭素で年代測定をするといった必要もあるのかもしれませんが、実際に我々が私的なところで見ていると江戸時代をどれだけさかのぼるか、ということがありますよね。

実際に『紫式部集』の陽明文庫本でも、近衛信尹の時に写されている。それがどれだけ前のものを写したのかが読めないということがあります。先ほど田中先生のお話にも出てきた三十六人集のなかに『紫式部集』が入っていて、もちろん奥書がないわけです。それで、四十人集というのに入っているのは南波先生が西本願寺本とおっしゃっていますが、実際は龍谷大学蔵本ですね、あれも奥書がない。もし奥書があったとしても、ああいう体裁のものは奥書が落とされる可能性がある。そうすると写した元の本にたどり着けないという、そういう限界がどうしてもあります。この前横井先生とも話したのですが、信尹の周辺をもう少し詳しく調べていかなければい

けないですね。どういう人間関係だったのか、というようなことがもう少しわかるべきなのではないかと思います。

久保木▼　二〇一二年の秋に、資料館で陽明文庫展が開催される予定です。昨年、その準備の一環で、『紫式部集』の陽明文庫本についても調べさせていただく機会がありました。おそらくこの陽明文庫本は、万治四年の火災で焼失した禁裏文庫本の転写本と考えてよいのではないか、と思います。久保田先生や横井先生も指摘されているように、『紫式部集』と同体裁の私家集の写本がほかに四本ありますが、まずそれらの四本について、禁裏文庫本の写しだろうと言えそうなんです。そうしますと、同じ体裁の『紫式部集』についても、同じ性格の写本なのではなかろうか、と推定できることになります。

もう一つ、陽明文庫本ではところどころに集付が見出されますが、その中に『秋風集』が含まれているのが、ものすごく注目されます。『秋風集』を集付に持つ私家集の写本と言えば、すぐに冷泉家時雨亭文庫のいわゆる真観本や資経本などが思い出されます。あるいは陽明文庫本の祖本は、そのあたりの写本群に連なるものではないでしょうか。

田中▼　鎌倉中期から後期ということですね。

久保木▼　そうですね。このあたりの詳しいことは、資料館で刊行する展示図録に書こうと思っていますので、ぜひお求めいただければ（笑）、と思います。

横井▼　それはぜひ公にしていただきたいですね。図録のようなコンパクトな形ではなく、論文の形でお願いします。

万治書写本の流れということで、そうすると禁裏本にさかのぼるということですね。

久保木▼　そうですね。

横井▼　そうなると、我が意を得たりという気がします。とにかく実践本も古筆切との関連もあって淵源は古いようですし、陽明文庫本もかなり古いということですね。

久保木▼　祖本は、少なくとも鎌倉時代までは遡る可能

性がありそうです。

横井▼ 我々がこうして頭をひねらないといけないのは奥書がないからなんですよね。でも奥書がなくても、先ほど加藤先生が口火を切ってくれたように、表紙が一連のものであるとかいうことは、かなり大きな手掛かりになります。たとえば、黒川文庫の中でもそういうことがあるし、外側でも一連の共通性があるのかもしれない。ただ、どうしても我々の力には限界がありますので、それはサンプルとしてお出ししたものでは、「参考」という欄を設けて、関連する情報をもたらしてくれるものを紹介することにしています。これは少なくとも本学の目録にはなかったことです。こういう形である程度の情報の補足ができたらいい、と考えています。

「電子化せよ」という久保田先生のアドバイスがありましたが、まず一応は活字のデータベースができたうえで、画像を含めたデータの電子化ができたら、と考えていますので、長い目で見ていただけたらな、と思います。

田中▼ 以前から横井先生に閲覧の仲介をお願いしていて、今日実現したのが学界では有名な山岸徳平先生所蔵の寂恵本『拾遺和歌集』です。山岸本は全二冊のうちの上巻だけですが、私が注目していたのは、この寂恵という人が古筆切にしょっちゅう登場する人だということなんです。確認できるだけでも『古今集』『後撰集』『千載集』『続古今集』の古筆切を残し、すべてが同筆で、寂恵本『拾遺集』ともすべて同筆、すなわち寂恵の真筆だということです。古筆切は九割以上はいい加減な鑑定だといわれていますが、必ずしもそうではないということが証明されたわけです。ですから、今後も寂恵本拾遺集は古筆切とも併せて、寂恵の書写活動の一端としてとらえていくべきだろう思います。

最近は実践女子大学でも古筆切の収集に意欲的に力を注いでいらっしゃるようなので、ぜひ、寂恵本を集めて展示していただきたいものです。

■中世王朝物語の場合■

久保田▼　『松浦宮物語』は基本的には伝本が二系統あって、伏見院本と後光厳院本ですが、その二系統にそれほど大きな本文異同があるわけではないので、作者が藤原定家かどうか、ということで議論されていましたが、今のところは定家の習作ということでいいのだろうと思っていますが、田中先生もおっしゃいましたが、「本やれてなし」という終わり方ですよね。それが源氏にもあり、それを受け継いでいるのだろう、とかいろいろな見方がありますが、物語が途中で切れてしまっているために、物語としての評価ということが難しい物語でもあります。

　ところが、このテキストを出版したところ、案外に売れたのです。どうもいろいろなところでお使いいただいたようです。でも伏見院本が大阪青山大学に購入され、ほとんど見ることができなくなっています。でもこれだけが唯一、活字化していて、もちろん以前に吉田幸一先生の「古典聚英」の中に影印がありますが、現物はもうほとんど無理です。これでももっと違う他系統の本がもし出てくるようなことがあれば、『松浦宮物語』ももっとおもしろいでしょうね。ただ実践女子大学は五種の『松浦宮物語』を黒川文庫と常磐松文庫の両方でお持ちなわけで、最初は『国書総目録』にあるものかと考えていましたが、そういうものはこれまでも拝見させていただいていましたが、そういう蔵書のあり方がただただすごいと思うばかりです。

　この中で知らずに書いたのが山岸徳平旧蔵の『松浦宮物語』です。これは山岸文庫の中に入っていました。書陵部本の新写本でした。それもここで確認させていただくことができました。

加藤▼　今のお話に乗っかりますと、実践女子大には『松浦宮物語』だけではなく、中世王朝物語（鎌倉時代物語）と呼ばれているもが多く所蔵されていて、今日、特に楽しみにしていたのが、『雫ににごる』の写本です。

田中先生や久保木さんにご覧いただいたら、「まぁ南北朝ぐらいの書写だろう」と言われました。天下の孤本、すなわち、『雫ににごる』の、この世で唯一の写本です。

他にも、先ほど述べた『兵部卿物語』や『岩清水物語』『苔の衣』『あまのかるも』など、重要な写本がいくつもあります。山岸徳平が自ら書写した、蓬左文庫本や宮内庁書陵部本の新写本もある。実践女子大でなら、中世王朝物語のほとんどが見られると言ってもよい、非常に恵まれた環境ですよね。目録については、国文学研究資料館にも言いたいことなのですが、或る写本が『鎌倉時代物語集成』とか『新編日本古典文学全集』などの底本となったときには、それを宣伝した方がいいのではないか、と思っています。実際には、国文学研究資料館内部の人でも或る写本が注釈化されていることを知らない、ということが多くあります。「この本はあの注釈書の底本となっている」とか「この写本はこの物語の唯一の写本である」とか「曼殊院にある『源氏物語』を見ることはできないが、その新写本が山岸文庫にある」といったPRを目録に入れてほしい、という気がします。

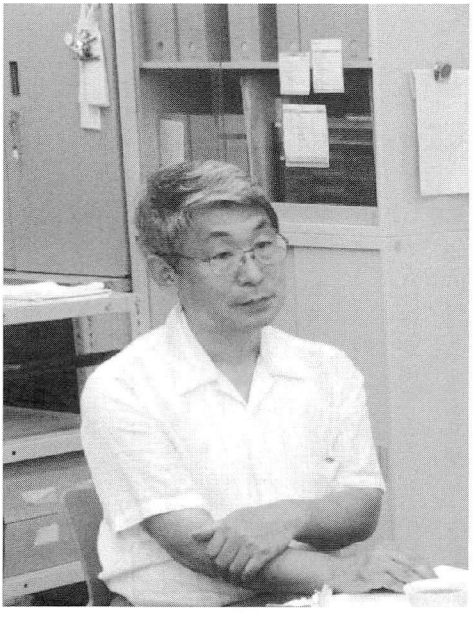
久保田▼ 今、加藤さんがおっしゃったように、底本になるというか「新日本古典文学大系」の大島本もそうなんだけど、一つの本で読もうということに、ある意味、回帰かもしれませんが、校本をつくるという作業をやってみて、これではどうもおかしいという所があったりしますが、大島本なら大島本で読もうということになって、それでも破綻が起きてしまうことになる。実際には一つの写本に不都合なところはあったとしても、それで読み解けるところは読み解いてみるというのが前提ですから、この実践女子大学にあるのは、はっきりと伏見院本ですから、この本が底本になっているというのは、大いに言ってもらって結構なことですし、先ほどお話しした『紫式部集』は実践女子大学本というのが、唯一無二のものとしてあるのですから。これほど研究されている私家集はほかにありませんよね。『紫式部集』だけと言っていい。他はようやく注釈が出てきている中にあって、校本、校異も進んでいって、伝本系統も一応整理が

ついているという、特異な存在なのが『紫式部集』です。そのなかでも実践女子大本が一番視されています。そういうものについては、所蔵元がアピールすべきだと思います。

横井▼ ＰＲというのは、ひとつの比喩だと思いますが、「こういうものがここにも使われている」というのは大きな情報ですから、そういう情報を提供してゆくのが重要ということですね。

■国学者たちの活動■

佐藤▼ 私は専門が近世なものですから、物語のお話にはついていくことができませんが、散佚してしまった黒川文庫には時々お目にかかります。本学の図書館でも、『水鳥記』という仮名草紙の京都版を追加で一冊購入しております。先日はある所から、黒川が関わった「古事類苑」を、四冊だけですが頂戴しました。黒川文庫はこれからも収集が可能でしょう。黒川文庫には、多くの国学者の書き入れや奥書のあるものがありますので、そういう江戸派の国学のなかで、黒川というのは、どういう位置を占めていたのか、ということをもう一回考えてみなくてはいけないのではないかと思います。どちらかというと今までの研究が、本居宣長系統の国学の考え方できたのですが、江戸の場合は状況かちょっと違いますから、その中で黒川の蔵書はどのようにして形成されてい



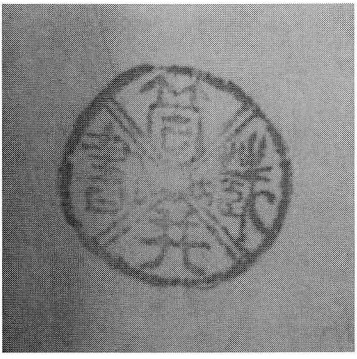
ったのか。中古・中世とは関わらない蔵書がかなりありますから、あれはいったい何なのか、とかいろいろ関心はあるのですが、いかんせん、きちんと追跡ができていない、方々にに分散していて、天理図書館にも少しありますし、いろんなところに分散してますから、どう考えたらいいか。

横井▼ 黒川文庫の本がどのように分散したのか、ということについては、今のところ詳細に研究した方がほとんどいなくて、さきほどの青裳堂書店の解題「黒川文庫の変遷について」というのが最新でもっとも詳細な研究だと思います。

これは、つい先日、佐藤先生から伺ったばかりのことですが、――この黒川文庫を実践女子大が購入する際に、図書館長はあまり気乗りではなかったという話です。

佐藤▼ 図書館に今いる職員の中では大井三代子さんという方が――三谷栄一先生のお弟子さんで――その当時まだ新人でいらして、納本された後の整理の様子を遠くから眺めていたということでした。その頃、学長の山岸先生の方から、図書館長だった三谷先生に黒川文庫本購入の話が持ちかけられたそうです。三谷先生としては、なぜ山岸先生がこれほど熱心なのか、いぶかしく思われたと、話されたそうです。

それから、購入する前に、物語関係のものが少し抜かれていますよね。ですから、本が実践女子大学に入る際に何があったのか、事情があるようです。ここに市川と書いてありますが、一誠堂の先代社長から聞いた時に



は、「市川か船橋」という言い方をしていましたが、それが米屋さんだということは聞いていまして、実践女子大学に納入する際に一誠堂が一冊一冊評価を付けたということは、亡くなられた先代から聞いています。「筒井蔵書」という蔵書印（写真）は、いまはここ文芸資料研究所にあるんですか？

上野▼　いいえ。お預かりしていません。国文学科の研究室から図書館に渡されたのではないでしょうか。

佐藤▼　それでは、今は図書館にあるのでしょう。それは私どもの同僚だった渡邉守邦先生の部屋にあったものでして、渡邉先生は「これは本来は図書館に納めるべきものだ」と言って、退職される時に、図書館に納められたのですね。桜の木の皮のついたままの印です。これが、黒川文庫の本にも押されているものがあります。

横井▼　お米屋さんでしたよね。千葉のほうでしたか？

佐藤▼　市川か船橋で、ここには市川と書いてあります。疎開していたんでしょうか。市川は空襲で焼けてはいませんから。

田中▼　最近の事、近代になってからの経緯のほうが、かえってわかりませんね。

一同▼　そうですね。

横井▼　どうしても個人が関わってくると、話が生臭くなりますから。知っている人でも、公表しないまま亡くなられたりすると、情報が雲散霧消してしまいますからね。

加藤▼ 久保木さんはノートルダム清心女子大学の黒川文庫も調査されたんですよね。

久保木▼ 和歌関係を、ほんの少し拝見した程度ですが。それでも今回、ノートルダムの本との関係も大事だなと思ったのは、実践の方の黒川文庫の中に『夜のねざめ』がありますが、その識語に「明治三十六年一月、一読の際、故横山由清の説に従て順序改正す」と書かれています。この横山由清の説というのは、『窓のともし火』のことでしょうか？

横井▼ そうですね。

久保木▼ そうしますと、『窓のともし火』はノートルダムの方の黒川文庫に入っていますので、ふたつに分かれた黒川文庫本の内容が、ピタリと結びつくことになりますね。こうした関連性を、ほかの本でも見つけられるのではないか、と期待されます。

付け加えますと、黒川文庫には、この『夜の寝覚』みたいに、国学者が関わった写本が多いなと思いました。伴直方や屋代弘賢の本、それに温古堂文庫の本も結構ありますね。和学講談所が明治元年に廃止され、その蔵書の多くは内閣文庫に移されたということですけれども、その一部が黒川文庫に入ったというのは、どういう経緯だったのか。そんなふうに、黒川文庫の中の本同士を、今度は「伝来」というつながりでも見ていくと、さらにいろいろな事がわかるのでは、と思います。

加藤▼ 佐藤さんがおっしゃり、久保木さんがおっしゃった、「国学者たちが何をしたのか」という問題ですが、小川陽子さん（松江高専助教）が、江戸の国学者たちが中古・中世の物語に熱く注目した時期があったことを追究していらっしゃいますね。先ほどの、表紙や装訂や筆跡の話とも関わるのですが、黒川真頼、本居宣長といった人たちが、集中的に『とりかへばや物語』『松浦宮物語』『石清水物語』『海人のかるも』『風葉和歌集』などを写したり校合したりした時期があったようで、そうした写本が、全国各地にあるようです。「中世王朝物語の、近世における享受」という問題を、こちらの文庫の所蔵本を用いて探って行ければ面白いと思っています。どな

たかやって下さると嬉しいのですが（笑）。

横井▼　それはやはり、言い出した人がやるべきでしょう（笑）。

久保木▼　『栄花物語』でも同じことを感じています。昔、紅葉山文庫に「二条為親真筆本」という古写本があったらしくて、それを文政年間や天保年間に、新見正路や屋代弘賢が古活字版に校合しているんですね。その校合本を、また別の誰かが転写していく。そのあたりが錯綜していて、なかなか整理がつかないんですが、とにかく一つの珍しい伝本に、複数の国学者が群がって、校合して、研究してゆくという動向が、江戸時代のある時期に、王朝文学に関してはあったのでしょうか。

横井▼　その『栄花物語』に関しては、「群がって」ということは、時期的にほぼ重なるのですか？

久保木▼　正路や弘賢が校合していたのは文政・天保年間です。

佐藤▼　『群書類従』本の刊行が関わっていませんか。

久保木▼　『栄花物語』は『群書類従』には入っていませんが、中世王朝物語は入っていますか？

田中▼　中世王朝文学に限らず、いわゆる物語というのは、古いものは数少ないんです。鎌倉期ぐらいのもので、途中はあまりない。室町期とか江戸のごく初期とかを飛ばして、一気に江戸の終わりのほうにいってしまいます。そういう傾向が見られます。そうすると、中世王朝文学も『栄花物語』も含めて、いわゆる物語系統の研究の仕方とか、なぜ室町期のものが少ないのか、ということですね。

久保田▼　先ほど述べた『松浦宮物語』は田中大秀が写していますからね。ですから高山に調査に行きましたけど、結局は本居宣長本の系統ですね。さっき久保木さんが言われたけど、一時期、こういうものを写し始めて、みんなで持ち合って、大秀だったら『竹取物語』の注釈が有名ですけれど、物語群を我先にと競って写していたような時期が本当にあったのかもしれないですね。ましてや、こんな『松浦宮物語』のようなものを、そんなにもてはやしてやるとは思えないわけです。

佐藤▼ 文政二年に『群書類従』の刊行が終わって、その後『続群書類従』の刊行を目指しての動きがあるようですね。

加藤▼ そのことと、いろんな人が校合本を作ろうという動きが…。

佐藤▼ さっき名前が出た人たちが関わってますから、屋代弘賢とか。

■校合本・書入本の価値■

横井▼ 「群書類従」がきっかけになっているかもしれませんが、あの時期というのは、ネットワークが密度濃くあったようですね。

佐藤▼ それが重層構造になっていたようで、実は先ほど、絵本が関心があると申し上げたのですが、そういった本のコレクションをすること自体が、江戸終わり頃の蔵書家たち、金座とが銀座の役人が、そういった本を引き取って、自分のコレクションとするということが起きていますから。

加藤▼ そういう場合の「本」というのは校合本なのでしょうか。

佐藤▼ いえ、とにかく本を集めるということが、ある意味一種のステータスのような感じの時代があって、これは国学の方に伺いたいと思っていることなんですが、『俚言集覧』という辞書がありまして、そこに引用された本が柳亭種彦の蔵書と重なります。しかし、柳亭種彦と著者の太田全斎との交渉が全然見つからないんです。『俚言集覧』の著者は村田了阿という説もあり、了阿だったら、種彦と仲がいいんです。村田了阿の住んでいたところは浅草辺りで、浅草の周辺というのが、さっき言った本を集めている人たちが別荘を持っているんです。江戸の市中は火災が怖いので、江戸の郊外にお蔵を建てて、そこに置いていたと思うのです。浅草を今は下町と言っているけれど、その当時は郊外で、ちょっと浅草寺を離れると、隅田川があって、別荘地で、江戸市中からちょっと船で来られる、大変に交通の便のいいところで

す。簡単に移動ができるので、そういったところで、黒川春村の住んでいたところが浅草ですよね、浅草ってそういう場所だったという気もします。

加藤▼　今おっしゃったのは、人と人とのネットワークのことですが、先ほどの久保木さんの話に戻しますと、今日拝見した本で気になったのは、異文注記を、とにかく執念深く付けている点です。さきほどは、『とりかへばや物語』や『松浦宮物語』など中世王朝物語の話をしましたが、田中先生のお話を聞きながら思い出したのは、『うつほ物語』に関心が集中するのも江戸時代の特定の時期ですよね。それから、『栄花物語』も。しかも、「他の写本では本文はこうある」というのを行間に書き込むのを、執念のように熱心に、写本を作っていく。岩波書店の『(旧)日本古典文学大系』の『宇津保物語』は、そういう書き込み入り版本の一つを「善本だ」と言って採用していたわけですが、果たして、異文注記を記していた江戸の人たちは、「善本」などというものを目指していたんだろうか？　という気になりました。「複数の異文情報を書き込む」ということの方を優先しているだけで、「どちらの本文の方が良いか」という問題は考えていなかったんじゃないか？　という気がしています。江戸の人たちは、何であれほど執念深く本文異同を記し留め続けたんでしょうね。

久保木▼　もはや校合すること自体が目的になっているんじゃないか、とすら思えてきますね。例えば「栄花物語」の為親卿真筆本にしても、そっくりそのまま転写しておいてくれたほうが、こっちはよっぽど有り難いんですが（笑）、でも、転写ではなく校合なんです。校合のほうが手間が省けるからなのかどうか、よくわかりませんけど、なぜ、そこまで校合にこだわるんだろう、というのはちょっと疑問です。

佐藤▼　本の価値が上がるんですよ。校合でいっぱい書き入れがあったほうが、まっさらな本よりも写本の場合は資産価値が上がるんです。今の古書店は書き入れがあると値段が下がりますけど、江戸時代の場合は逆なんです。

久保木▼ 古活字版に書き入れるのも同じですか？

佐藤▼ 同じ感覚でしょうね。結局、勉強しなくちゃならないわけで、次の人はそれを全部引き継げるので、本の価値はどんどん高まっていくんです。

横井▼ 江戸時代の人は、我々が珍重するほど、古活字に関心を持っているわけではないんですよね。

佐藤▼ ないと思いますね。そんなに高くはなかったと思います。むしろ校合を加えていることのほうが貴重で、誰の校合本か、ということの方が意義があって、それで先ほどの宣長の校合を「湖月抄」ですっかり写すような現象が起きるんだと思います。いま古書店では、版本より写本のほうが高いですけど、江戸時代には逆に版本のほうが高かったのです。

久保田▼ 少し話題が逸れますけど、前にも言った『松浦宮物語』のことで、実際にあったことをお話すると、数年前に『松浦宮物語』の絵巻がウチにあるといって、京都の古美術商から電話があったんです。『松浦宮』の絵巻が作られたことは『古今著聞集』に書かれていますが、その絵師は「長賀」という人物です。それは絵画史を調べたら出てきて、わかったんです。絵巻が作られたことも、尊性法親王というのが、長岡京のお寺にいて、そこから料紙が足りないという手紙があって、その紙背にお経が書かれているんですが、それは真経寺文書という形で残っています。それを書いた私の論文を見て、古美術商が電話をしてきたようです。これで『松浦宮物語』の絵巻があったら、これは国宝だなどと思いまして、それで慌てて出向いたところ、それが非常に立派な二巻の絵巻でした。これは、と思って、ざーっと絵を開いて部屋中に広げても全部は拡げきれないほどの長巻でした。金が鮮やかだったんですが、どう見ても物語の内容と違っていました。それは結局、幸若舞の「新曲」のものでした。がっかりはしましたが、でも、「あるところにはあるものだ」ということが何となく分かってきたものでした。ついでに見せてくれたのが『源氏物語』の画帖でした。大名持ちのもので、かなりなものでした。幸若舞のほうは、その一年後くらいに、思文閣から相当

な値段で出ました。

横井▼　目録に載っていたんですか。

久保田▼　そうです。わざわざ全部校異してあげて渡したんですけどね。『源氏物語』の画帖にしても、伊井春樹先生に会って、話をしたんですが、私の知り合いから一回話があって、伊予の伊達家の持っていた『源氏物語』の画帖だったというんです。これを買わないか、という話が出てきて、ところが、一緒に持ってきたのが、伊井春樹先生の「見せていただきまして、どうもありがとうございました」という礼状だったんです（笑）。「伊井さんは平成の鑑定士ですね」と笑ったんですが、それも大名持ちのもので間違いないでしょう。そうなると、まだいろんなところで、市井の中で回っている、埋もれているものがかなりあるんだろうな、と思います。ごく一部だけがこうして我々が見られる状態になっているだけで、僕の友人でお茶の宗匠をやっている人物のところにも、それ相応のもの、例えば茶掛けなんかで、田中先生が喜びそうなものがあるわけです。だけどそんなものは一切外には出てこないわけです。ですから、見えないところで、相当な量のものが流れて動いているのだろうと思います。

これを話したのは、実践女子大の図書をもっともっと充実してもらいたいからです（笑）。

田中▼　今は古書店も資料を集めてくるのが大変ですが、苦労して集めても、それを納めるところがないようです。一般的に大学は予算が減らされて、それを嘆いているようです。

実践女子大学に予算があるかないかは、私は知りませんし、こういう場で申し上げることでもないのですが、とにかく古書店は困っているそうです。

横井▼　予算がないながらも、高い古筆切を（笑）、買っているというか、買わされている、それも必要に応じてということです。のちほど、少しだけご覧にいれたいと思います。

佐藤▼　古筆切ぐらいしか買えないですよね。

横井▼　本の形のものは……。

田中▼　昔なら写本、うまくすれば古写本が買えたのが、今は紙切れでがまんしなければならない、という時代がきたということです。そういう意味では、古筆切というのは昔は個人の好事家が買うもので、大学が買うものではなかったのですけれど、古書店も大学をターゲットにしてがんばってもらうしかないですね。

佐藤▼　皆さん、同業ですからご存じでしょうが、学校会計法が悪いですよね。分割では買えないんですよね。上下あると二年で分けられるのですが、一冊だと年度で分けることができないのです。

横井▼　つい最近、都内の某所、久保木さんもご存じの古書肆に参りましたら、結構な古筆切があって、それこそ『明月記』やら何やら、名物切がいっぱいあって、それが無造作に出てくるんです。その値段がなかなか聞けないので、察するしかないのですが、やはり単年度の予算では厳しいなという感じがします。でもこれは一点ものですから、複数年度にわたって購入することはできない。

田中▼　古筆切なら切ってもらったらどうですか（笑）。

■おわりに■

横井▼　黒川文庫という性格からして、たとえ平安・中世の物語であっても、元々のオーナーである黒川真頼から始まって、近世という時代が非常に重要な時期であると思います。私は、なかば冗談で「『紫式部集』は近世文学です」などと言っていますが、伝流や享受の問題を考えれば近世という時代になってしまうわけで、平安時代の研究者たちは近世も視野に入れた勉強をしなければいけないと思います。

　さらに付け加えると、近代現代の人たちの動きというものが、こういう本が右から左へ移っていく、流通するということの鍵を握っていたりするので、そういう情報が隠されているところで、我々が「ああだこうだ」と付度せざるを得ないというのは、非常にもどかしい思いがするわけです。ですが、今後、こういう機会を増やし

て、先生方には本学の蔵書を熟覧していただき、徹底的に研究していただければ、と思います。

そのきっかけになればと、今回こういう集まりを企画いたしました。座談会はこれで終了いたしますが、この上また、適宜、貴重な情報をお聞かせいただければ幸いです。「これは横井の耳にだけ」とか「これは公表してもいい」とか分けたうえで、お話いただければよろしいかと思います（笑）。

本日はありがとうございました。

一同▼ ありがとうございました。

注

（1）『黒川文庫目録』（実践女子大学図書館、一九六七年一一月刊）。

（2）柴田光彦「黒川文庫の変遷について」（日本書誌学大系『黒川文庫目録　索引編』青裳堂書店、二〇〇一年九月刊、所収）。

（3）池田利夫「祖型本『浜松中納言物語』の写し手は誰――『とりかへばや』と『恋路ゆかしき大将』と」（『源氏物語回廊』笠間書院、二〇〇九年一二月刊、所収）。

（4）久保木秀夫「万治四年禁裏焼失本復元の可能性――書陵部御所本私家集に基づく」（『禁裏本と古典学』塙書房、二〇〇九年三月刊、所収）

（5）久保田孝夫・関根賢司・吉海直人編『松浦宮物語』（和泉書院、一九九六年三月刊、改訂版二〇〇二年一〇月刊）。

（6）久保田孝夫・廣田收・横井孝編著『紫式部集大成』笠間書院、二〇〇八年五月刊）。信尹によ

る外題については同書所収廣田「陽明文庫蔵『紫式部集』解題」参照。

（7）平成二一年度中古文学会秋季大会、シンポジウム「『紫式部集』研究の現在」二〇〇九年一〇月三日、於関西大学千里山キャンパス）

（8）横井孝「形態と伝流から『紫式部集』を見る」（『中古文学』第八五号、二〇一〇年六月）

＊文責　文芸資料研究所